テーマＢ－２【小学校　総合的な学習の時間（英語活動)】

鹿島市立七浦小学校　教諭　髙稲　久美子

要　　旨

小学校英語活動において，コミュニケーションへの意欲を高めるために，人とのかかわりを重視し，「聞く」ことに重点をおいたタスクベースの活動を取り入れた単元開発を行った。授業実践を通して，ＡＬＴや友達とのコミュニケーション活動を楽しみながら，一生懸命に相手の言葉を聞こうとし，積極的にやりとりをしようとする児童の姿が見られるようになった。そして，満足感や成就感を味わわせたことにより，次の伝え合いへの意欲も喚起できた。また，ＡＬＴを通して異なる文化に触れることにより，気付きを深めたり，自分の文化を振り返らせたりすることができた。

〈キーワード〉　①コミュニケーションへの意欲　②聞く必然性　③文化への気付き

１　研究の目標

小学校英語活動において，「聞きたい」「伝えたい」と感じるような指導の工夫を通して，伝え合うことへの意欲とコミュニケーションの力を高めるような指導の在り方を探る。

２　目標設定の理由

人との直接コミュニケーションの機会が減少したことにより様々な問題が起きている現代社会においては，人と直接かかわりながら，よりよい人間関係を築くことのできる社会性をもった児童の育成が必要となっている。このことは総合的な学習の時間のねらいの一つである「自分の考えや意見をもったり，自分のよさに気付き，自分に自信をもったりするなどして自己の生き方について考えることができるようにすること」(1)と相通じるものである。また，国際理解に関する学習の一環としての小学校英語活動のねらいは，「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。自己表現力を豊かにする。様々な活動を通して外国の文化や生活への関心・理解を深める」(2)ことにある。このことから，言葉が十分には通じない相手であっても，その人に関心をもち，積極的にコミュニケーションを図ろうとするような態度を養うことが望まれていると言える。また，そのような態度を育てることは，将来にわたって必要なコミュニケーション能力の素地を作ることになると考える。

このようなことから，児童が英語を通して人と伝え合うことに関心をもち，人と積極的にかかわろうとする態度や能力を身に付けていくためには，小学校英語活動においてどのような指導の工夫をしたらよいかということについて探っていきたいと考え，本目標を設定した。

３　研究の仮説

英語活動の指導過程を通して，いろいろな相手と伝え合う場を設定し，「聞きたい」「伝えたい」という思いをもつような指導の工夫をすれば，人とかかわることに意欲をもち，積極的にコミュニケーションをとろうとする態度が育つであろう。また，異なる言語や文化をもつ人ともかかわることにより，自分や周りの人への気付きをもつことができるようになるであろう。

４　研究の内容と方法

(1)　対人的コミュニケーションと英語活動について文献や資料を基に理論研究を行う。
(2)　コミュニケーション活動を取り入れた英語活動の単元開発と授業実践を行う。
(3)　児童の変容を基にして，仮説の有効性を検証する。

５　研究の実際

(1)　研究の全体構想

人との直接コミュニケーションが希薄化している現代社会にあっては，子どもたちにいろいろな相手とかかわる機会をもたせ，人とかかわり合っていくことのよさや大切さを体感させていくことが必要である。人と積極的にかかわっていこうとする子どもの姿があるとき，それを支えているものは第一に相手への関心であり，かかわろうとする意欲であろう。小学校英語活動では，そのような関心や意欲をはぐくんでいくことが重要である。それは自分と異なる言語や文化をもつ人とかかわらせることで，人や伝え合うことへの関心を高め，積極的にコミュニケーションをとろうとする態度をはぐくむ学習を展開することができると考えられるからである。また，自分と異なる文化に触れさせたり，それと比較して自分の文化を振り返らせたりすることも大切である。どの文化が優れているという観念ではなく，互いの文化を理解させ，尊重する態度を身に付けさせることは，国際化社会にあっては大変重要なことであると言える。

そこで，小学校英語活動を「英語によるコミュニケーション活動」ととらえ，英語活動に次のような要素を盛り込んだ単元開発をしていくことにした。(図１参照)

ア　児童が楽しいと感じる活動

活動自体が児童にとってわくわくするような楽しいものであることが大切である。ゲームや歌だけでなく，児童の実態に応じた活動を教師が工夫する必要がある。高学年では，知的好奇心を喚起するような活動も取り入れるようにする。

イ　「相手の言いたいことが分かった」，「自分の気持ちが通じた」という満足感や成就感を味わうことができるような活動

聞くことに重点を置いたタスクベースの活動を取り入れる。タスク（作業）を遂行するために「相手の言葉を聞きたい」と思うような活動を取り入れることにより「聞く必然性」を設定する。

ウ　一緒に活動することを通して連帯感や親近感を感じるような活動

児童と児童が英語活動の中でコミュニケーションを多くとることを通して協力し合ったり，連帯感や親近感を感じたりできるようにする。今まで気付かずにいた友達のことを知らせたり，よさに気付かせたりすることは，よりよい人間関係を作ることにもつながっていくと考える。

エ　ＡＬＴをはじめとする異文化をもつ人とのかかわりの中で，異なる文化に触れたり，気付きを深めたりできるような活動

自分とは異なる文化について児童が「理解する」のではなく，ＡＬＴをはじめとする人を通して，その背景にある文化に触れ，気付きを深めるようにさせる。その際，児童が「見る」「聞く」「味わう」「かぐ」などの五感を使い，実感を伴って体験できるようにする。

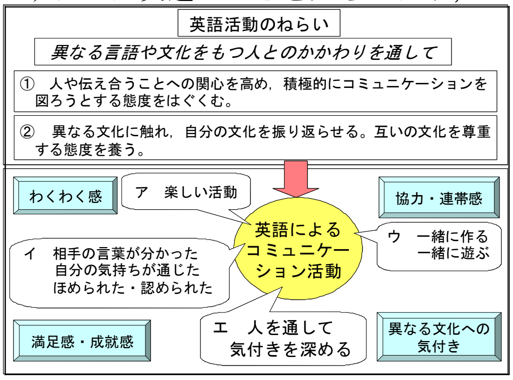

図１　英語活動に盛り込む要素

(2)　授業の実際　（対象児童　所属校第５学年　男子11名　女子22名　計33名）

ア　次の３つの点に特に留意して，英語活動の単元作成を行い，授業実践を行った。(次頁表１，図２参照)

(ｱ)　コミュニケーションの場を多く設定すること

(ｲ)　「聞く必然性」をもたせること

(ｳ)　文化への気付きをもたせるような活動を取り入れること

表１　単元作成の観点と授業の実際

単元 観点	授業Ⅰ「新しい先生と仲良くなろう」（全２時間）	授業Ⅱ「ケイ先生のふるさと（ポートランド）を知ろう」　（全２時間）	授業Ⅲ「オリジナルカレンダーを作ろう」　　（全２時間）
活動のねらい	・　新しく赴任したＡＬＴとの初めての出会いの場でコミュニケーションへの意欲を高め，新しい先生に親近感をもたせる。	・　クリスマスツリーを作ったり，ＡＬＴの家庭の味であるジュースを作ったりすることを通してＡＬＴのもつ文化に触れさせる。	・　来年度に使うカレンダーを作る活動に取り組むことを通して文化への気付きを深めさせる。
コミュニケーションの場の設定	・　自分が知りたいことを，ジェスチャーや簡単な英語を使って質問させた。 ・　ＡＬＴについてのクイズやゲームをする際にヒントを聞きに行かせるようにした。	・　自分が欲しい飾りをＡＬＴにもらい，クリスマスツリーを作らせた。 ・　ジュースを作る活動でＡＬＴのところに材料をもらいに行ったり，作り方や味をＡＬＴに確かめたりさせた。	・　絵をかくときに，ＡＬＴがグループを回り，児童に質問したり，絵をほめたりした。 ・　ＡＬＴのイメージを児童に分かりやすく伝えることで，やりとりの場を作った。
聞く必然性の設定	・　ワークシートを利用し，新しいＡＬＴに対する関心と期待をあらかじめ高めておいた。 ・　ＡＬＴ本人のことでゲームやクイズをし，答えをＡＬＴが言った。	・　ジュースの作り方をＡＬＴの指示で作らせた。 ・　日本とは違う自然や町並みの様子をスクリーンに映してＡＬＴが説明し，興味を喚起した。	・　ＡＬＴのイメージを絵にかくために，ＡＬＴの言葉を一生懸命聞かせた。 ・　佐賀とポートランドの毎月の平均気温を聞き取って書かせた。
文化への気付き	・　ＡＬＴの目や髪，肌の色に注目してワークシートに色塗りをさせ，それらの色について説明を聞かせた。 ・　自己紹介の中で，日本との時差の話や気候風土の違いについての話をしてもらった。	・　ＡＬＴがクリスマスを祝う習慣について話し，異なる文化に気付かせた。 ・　シナモンの香りを苦手とする児童もいたことから，食文化の違いと，互いを認めることの大切さに触れた。	・　カレンダーの上部にそれぞれの月から連想する絵やイラストをかかせ，それと並べてＡＬＴがイメージするものをかかせて，両者を比較できるようにした。

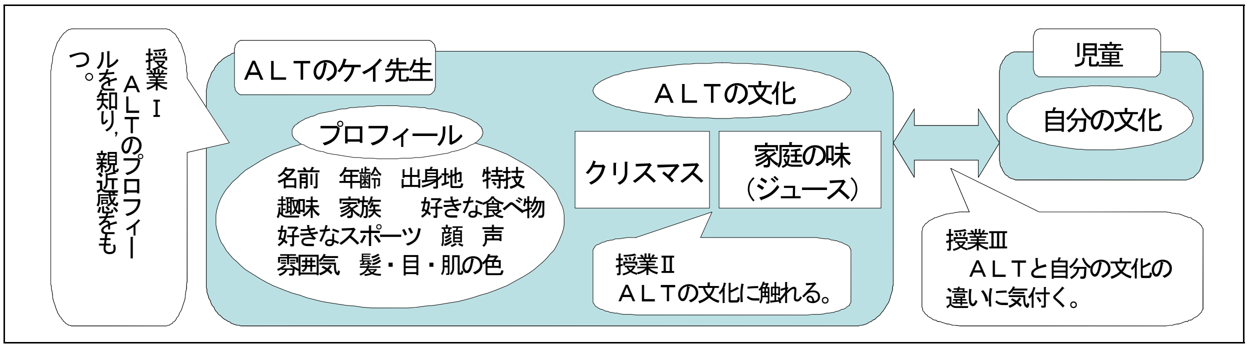

図２　授業Ⅰ～Ⅲの単元の流れ

イ　評価について

英語活動のねらいに沿って，表２のように評価の観点と趣旨を設定した。

表２　評価の観点と趣旨

コミュニケーションへの意欲	コミュニケーションの技能	文化への気付き
積極的に人とかかわろうとする意欲をもち，やりとりを楽しもうとする。	簡単な英語による会話の大まかな内容が分かり，指示に従って作業をしたり質問に答えたりすることができる。	異なる言語や文化に対して気付きをもち，自分の文化を振り返ることができる。

(3)　児童の変容と考察

英語活動のねらいと研究の趣旨を基に，検証の視点を「コミュニケーションへの意欲」と「文化に対する気付き」の２点とした。「聞く必然性」については，コミュニケーションへの意欲を喚起するために必要なものであるととらえた。検証の方法は授業中の児童の行動，発言などの様子の観察，ビデオ映像，振り返りカード，授業前と授業後のアンケート調査などで行った。児童の変容を以下に述べる。

ア　コミュニケーションへの意欲の高まり

児童は，授業Ⅰで初めて出会うＡＬＴのプロフィールを知り，授業ⅡでＡＬＴを通してその文化に触れ，授業ⅢでＡＬＴの文化と自分の文化を比較することにより文化への気付きを深めた。授業の前には，英語活動に対して「とても楽しい」,「楽しい」と感じていた児童は90%近かったものの，中には「英語が分からないと仲良くなれない」,「何と言ってよいか分からないから不安になる」と感じている児童も見られていた。授業を進めていくにつれ，ＡＬＴとの親密度が増し，コミュニケーションを図ろうとする意欲が高まっていった。表３に示すように，１時間の授業の中で意欲を高めた児童もいれば，活動を重ねていく中で意欲を高めていった児童もいた。また，どの授業の後でも「授業が楽しかった」と答えた児童は，その理由として「ケイ先生と話ができたから」という理由を一番に挙げ,「楽しさが足りなかった」と答えた児童のほとんどは，その理由として「あまり話ができなかったから」と答えていた。このことから，どの児童もＡＬＴのケイ先生とかかわり合うことへの意欲が高かったということがうかがえた。

表３　Ａ児とＢ児の変容

（Ａ児）　授業Ⅰで，Ａ児はＡＬＴのふるさとでは雪が降るかどうかについて，なかなか聞きに行けないでいたが,「snowだけでも通じるかもしれないよ」とＪＴＥが声を掛けたところ，ジェスチャーを使いながら質問をしに行くことができた。言いたいことが伝わり，“Yes, snow!”というＡＬＴの答えに自信が付いたＡ児は，その後，何度も質問に行くことができた。振り返りカードには「ケイ先生への質問が通じてとてもうれしかった。これからももっと話したい」と記している。

（Ｂ児）　授業Ⅰでは，質問したいことがあっても言い出せないでいたＢ児は，授業ⅡではＡＬＴに自分の欲しい飾りをジェスチャーを使って伝えることができた。ジュースを作る際は，自然にＡＬＴに話し掛けてやりとりをし，伝わったときには笑顔を見せていた。振り返りカードには，授業Ⅰでは「英語があまり分からないから今日の楽しさは40点。ケイ先生との仲良し度は60点で，英語が分かるなら話をしたい」と書いていたが，授業Ⅱでは「クリスマスツリーの飾り付けをしたりジュースを作ったりしたことが楽しかったので，楽しさは100点。飾り付けのときにケイ先生と話ができたから先生との仲良し度は80点になった」と書いており，満足感を味わった様子が分かる。

（注）　------- ：行動の変化　〰〰〰 ：気持ちの変化

また,「聞く必然性」を設定したことで，相手の言葉を一生懸命に聞こうとする態度が育ってきた。クイズやゲームなどの楽しい活動や，聞くことを中心にしたタスクベースの活動を通して，一生懸命聞いたり，何とかして伝えようとしたりする姿が見られるようになった。例えば，ＡＬＴの好きなことの予想クイズで，答えを知りたい気持ちからＡＬＴの言葉に耳をすましたり，自分たちが知らないジュースを作るためにＡＬＴの英語を聞き取ろうとしたりする姿が見られた。ＡＬＴの“Put on your apron.”という指示に全員がさっとエプロンを付けるなどの適切な反応も見られた。さらに，英語が完全には分からなくても，やりとりができるということに，児童自身が気付くことができた。このことに関連して，授業後の振り返りカードの記述にはコミュニケーションへの気付きが見られた。３回の授業実践後の振り返りカードの記述からは，一緒に活動する中で，ケイ先生との親近感が増していったことや，児童が伝え合いの楽しさに気付いたことが分かる。（表４参照）

表４　コミュニケーションへの気付きが見られる記述

授業Ⅱを振り返って
- ケイ先生は，自分たちに何とかして伝えようとしていることに気付きました。
- 英語でもケイ先生が手など体の部分を使って教えてくれたので，よく分かりました。
- ふるさとの説明で動きも入れてくれたので，分かりやすかったです。これからも動きを入れてほしいです。
- 英語でも日本語でも何とかすると伝わることに気付きました。

３回の英語活動を振り返って
- 最初，ケイ先生に会ったとき，アメリカの人とうまく話せるかなあと思ったけど，いろんなことを一緒にして，ケイ先生が話していることがだいたい分かるようになりました。
- いろいろな英語が少し分かるようになってきました。英語活動の楽しさが分かりました。
- 私はあまり，ケイ先生としゃべっていませんでした。でも，ジュース作りやクイズなど，いろいろして仲良くなっていきました。もっと仲良く楽しい英語活動をしていきたいです。
- 英語だけの話は初め分からなかったです。でも，だんだん仲良くなるにつれて，分かっていったのでよかったです。

イ　文化に対する気付きの深まり

ＡＬＴを通して，異なる文化に触れたり，同時に自分たちの文化を振り返ったりする英語活動は，児童にとっては初めての経験だったが，授業実践を通して，多くの気付きをもたせることができた。表５に示すように，児童が知っているものや児童の文化と比較させることで，より実感を伴って気付きを深めさせることができた。また，これまで児童が意識することのなかった「時差」や「緯度」などの概念にも初めて触れさせる機会にもなり，児童の世界観を広げることができたと思う。英語活動が好きな理由を聞いた意識調査で，授業後は，「外国のことを知ることができるから」と回答した児童が増えたことから，文化についての気付きを深めるような活動に楽しさを感じていることが分かる（図３）。自分が知らなかったことや文化について気付きを深めさせる活動は高学年の児童に適した活動であったと言える。

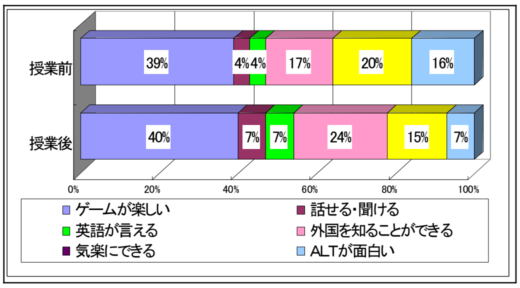

図３　英語活動が好きな理由（複数回答）

表５　振り返りカードに書かれた「文化への気付き」

自分たちの文化と比較しての気付き

- 日本では雪だるまは２段に作るけど，アメリカでは３段だったのでびっくりした。
- クリスマスに教会に行くことは，私たちがお正月に神社に初詣に行くことと似ていると思った。
- 同じ月でもイメージが違うことが分かった。
- 日本でのイメージは季節と関係あるものが多いけど，ケイ先生のイメージは記念日が多い。
- ポートランドと佐賀では毎月の平均気温が似ていた。
- 佐賀は降水量がかなり多かった。たくさん雨が降る時期が佐賀とポートランドでは逆だった。
- アメリカでは入学式が９月にあり，日本と５ヶ月も違うので，とてもびっくりして心に残った。

世界観が広がったことがうかがえる記述

- 家族でも目の色や髪の色が違うことがあると分かって，びっくりした。
- ケイ先生の国と日本では17時間も時差があるということが，とっても面白かった。
- ポートランドが佐賀より北にあるのに気温が高い月があるのはどうしてなのか知りたい。

３段の雪だるま
（児童の図工作品）

ウ　振り返りカードから見た変容

３回の授業の振り返りカードに「ケイ先生の英語だけの話が分かりましたか」という問いを設定し，その集計結果について考察した。（図４参照）

(ｱ)　授業ⅠとⅡの比較から

ＡＬＴのケイ先生の英語の説明が「よく分かった」「だいたい分かった」と答えた児童が，授業Ⅱでは授業Ⅰの２倍になっている。また，「あまり分からなかった」と答えた児童がⅠでは７名いたが，Ⅱではいなかった。ⅠとⅡで話の難易度に違いはなく，児童の聞き取りの力が伸びたとは考えられない。ⅠとⅡの相違点を考えてみると，まず，Ⅱは新しいＡＬＴとの英語活動も２回目となり，児童はⅠのときより和やかな雰囲気で先生を迎えたことが挙げられる。話を聞くときもリラックスしており，内容の把握がしやすかったようである。また，ケイ先生のふるさと，ポートランドの様子をスクリーンに映しながら話してもらう際，言葉だけでなく，ジェスチャーを使ったり，図や絵をかいたりしての説明だったので，子どもたちにも分かりやすかった。特にⅡではスクリーンを使用したので非常に見やすく，ジュースを作る作業の際も参考にさせることができた。以上のようなことから，相手の言葉を分かろうとするには，相手との心的な距離が近いこと，心的ハードルが低いことが必要であると言える。また，言語だけでなくジェスチャー，図や絵で示すなどの非言語によるメッセージも大変有効であることや，大きな写真，スクリーンなどの視覚的な教材の工夫も必要である

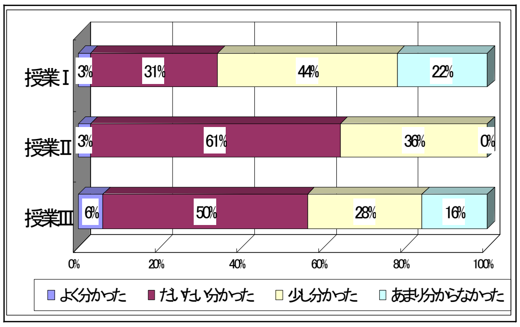

図４　「英語だけの話が分かった」と答えた割合の変化

ことが分かった。このような要素が児童の「聞きたい」という意欲を喚起したと同時に，ＡＬＴの英語が「だいたい分かる」という状況を作り出したと言える。

(ｲ)　授業ⅡとⅢの比較から

Ⅲではより「分かった」「少し分かった」と答えた児童が減り，「あまり分からなかった」と答えた児童が増えた。要因として，ⅢではⅡより児童にとって馴染みのない内容の話が多く，難しかったということが言える。例えば，“Saint Patrick's Day”，“Thanksgiving Day”，「独立記念日」などについてはＪＴＥが日本語で説明を加えたが，児童はイメージをもつことができなかったようである。先にも述べたが，自分とは異なる文化について「理解させる」のではなく，自分の文化と比較したり，実感を伴ったりするような活動を通して気付きを深めさせていくことが大切であるということが，この結果からも言える。

６　研究のまとめと今後の課題

(1)　コミュニケーションへの意欲を高めるための単元構成や授業作りには，次のような手立てが有効であることが明らかになった。

ア　「聞きたい」「自分もやってみたい」という思いをもたせるような活動の工夫

児童が「聞きたい」「聞かなければならない」という必然性をもって相手の言葉に耳を傾けるようなタスクベースの活動が有効である。コミュニケーション活動を楽しませながら，その中で使われる言葉に反応させたり，非言語メッセージや視覚的な教材を手掛かりに，話の内容を推測させたりすることで，英語が「だいたい分かった」という成就感を味わわせることができる。

授業実践では，英語が話せなくても，児童とＡＬＴとの伝え合いが成立したことから，児童は，「何とかして伝えようとする意欲があれば伝えられるのだ」ということに気付くことができた。人とかかわる場を多く設定し，その中でやりとりをする活動を工夫することで，相手との心的な距離も近くなり，伝え合いがうまくいくようになる。そのような経験を積ませることで，伝え合う意欲や態度をはぐくんでいくことができる。

イ　人を通して文化への気付きを深めさせる活動の工夫

ＡＬＴやＪＴＥとのかかわりを通して，文化への気付きを深めさせることは，その人への関心を高め，コミュニケーションへの意欲を喚起することにつながる。また，五感を使って相手の文化に触れさせることで，自分の文化を振り返らせたり，児童の中の世界観を広げさせたりすることができる。このような活動は児童の知的好奇心を刺激するため，特に高学年の活動として適していると言える。

(2)　今後の課題

ア　伝え合いの意欲を見取るための客観的な評価方法についての研究

イ　友達との交流を通して，自分や周りの人への気付きを深めさせる手立ての研究

《引用文献》

(1)　文部科学省　『小学校学習指導要領解説　総則編』　平成11年　東京書籍　p.46

(2)　文部科学省　『小学校英語活動実践の手引』　平成13年　開隆堂出版　p.22

《参考文献》

・　宗　誠　「小学校英語活動で国際コミュニケーションの素地を作る」　『テレビ・ラジオ学校放送　小学校３年』　2007年　日本放送出版協会

・　金森　強編著　『小学校の英語教育』　2003年　教育出版

・　松川　禮子編著　『小学校英語活動を創る』　2003年　高陵社書店